

「NHK 音楽祭 2021」 - 金沢にて

藤原 道夫

「NHK 音楽祭」は 2003 年に始まり、海外の著名なオーケストラと NHK 交響楽団それに優れたソリストたちによって秋に NHK ホールで 4 ないし 5 公演を行う形で継続されてきた。例年 2, 3 公演を聴いてきた。昨年 (2020) は全公演が中止に。今年は趣向を変え東京、大阪および地方都市 (仙台、金沢、熊本) で地元の交響楽団が演奏会を開く、という形式で行われることになった。たまたま金沢での公演を聴きに行った。

10 月 9 日夕方、石川県立音楽堂コンサートホールに向かう。駅のすぐそばで立地はすこぶるよい。ここでオーケストラ・アンサンブル金沢 (OEK) によるオール・モーツァルト・プログラムの演奏会が開かれた。OEK は 1988 年に国内外のプロ約 40 名から成る室内管弦楽団として創設された。初代音楽監督に岩城宏之が就任し、金沢市を中心に国内外で演奏会を行ってきた。07~18 年は井上道義が音楽監督、今回の演奏会も彼の指揮だった。

演目はピアノ協奏曲など 4 曲、最も聴きたかったのは最後に演奏された「交響曲第 29 番 イ長調 K.201」。この曲は 17 歳のモーツァルトがウィーン旅行からザルツブルクに戻った翌年に作曲された。これに先立つ交響曲第 25 番は、映画『アマデウス』の冒頭で鳴り響く音楽として知られ、劇的な音を響かせる。第 29 番は弦による爽やかな導入で始まる。井上さんはいいテンポで進める。次第にウィーンでハイドンから学んだ技法が発揮され、音に深みが増していかにモーツァルトらしい音創りが展開されてゆく。弦の音は私の趣味からすればきついかたと感じたが、第 2 楽章に入って弱音器を付けての演奏になると、響きがとてもよくなっていった。第 3、4 楽章は、父に庇護された神童・天才少年から脱し、音楽の世界に独り立ちしてゆく青年モーツァルトの意気軒高な心境を彷彿とさせる音創りとなっている。井上さんの指揮に熱が入る。数少ない管楽器の響きもよく、大いに楽しめた演奏だった。

空席が目立ってはいたものの万雷の拍手に応え、井上さんが独得の口調で「すばらしいから何回でもやる」と言うや、すばやく振り向いてアンコールの音楽を鳴らせた。武満による曲だ、なんと洒落た選曲だろう。曲名は後で彼による映画音楽「他人の顔」だと知った。

会場のコンサートホールは総座席数 1560、縦長で 3 階席まであり、音が聴きやすいシックな創りだ。ホールは石川県と金沢市とのバックアップにより 2001 年に完成され、OEK の活動拠点となっている。定期公演のプログラムを見ると、国内で名の知られた指揮者やソリストが名を連ねている。首都圏から離れた人口 45 万人余の中都市に、クラシック音楽の演奏を楽しめるホールがあるのは、この地方の文化水準を反映しているのだろう。